日刊建設工業新聞
2012 年 11 月 30 日　掲載

建築へ

『考・東日本大震災』でシンポ

東京都市大学工学部の建築学科と都市工学科が、「考・東日本大震災　その２―わたしたちは震災から何を学ぶか？―」をテーマにしたシンポジウムを24日に東京都世田谷区の同大世田谷キャンパス４号館で開いた。皆川勝都市工学科教授が震災以降の土木学会の活動について、濱本卓司建築学科教授が日本建築学会の動きについてそれぞれ報告。池田貴都市再生機構宮城・福島震災復興支援局次長が「復興まちづくりの現状と課題」、草柳俊二高知工科大教授が「大災害における技術者の役割」をテーマに講演した。増田陳紀都市工学科教授と天野克也建築学科教授の進行で講師４人によるパネルディスカッションも催された。（編集部・山口裕照）

東京都市大学

都市工学、建築学が連携し、考え、行動を

講師が議論したパネルディスカッション。左から、皆川、濱本、池田、草柳、増田、天野の各氏

冒頭、中村英夫学長は「震災後はいろんな組織ができ、さまざまな提言が出ているが、その多くは抽象的で誰でも思いつくようなものばかりだ。小さなことでも具体的なものを実現していくことが重要だ。この大学で実現可能な新しい方策をぜひ打ち出し、社会にアピールしていきたい。今後も二つの学科の連携した活動を続けてほしい」とあいさつした。

◎　◎

「技術者への信頼を回復するために」を主題に講演した皆川氏は、土木学会が設置した「社会安全研究会」の活動内容や成果を紹介。「社会の安全」を実現するには、設計者、事業者・行政、市民の三つの視点からアプローチし「社会安全」を共有・構築していくことが必要だと指摘。その上で、市民は共有・・ソフト対策の効果も解説。「津波にどう備えるかが大事になる。具体策としては津波荷重を評価し対津波設計を行うとともに、ハードとソフトの対策を総合化することが必要だ」との見解を示した。

◎　◎

池田氏は都市機構が手掛ける復興事業の進行状況を報告。宮城県女川町の事例を紹介し、▽『防災』の概念では災害対応はできない▽『災害マネジメント』の概念に基づいた『非常時対応システム』を備えなければいけない」と持論を展開。約２９００ある自治体ごとに非常時対応システムを作っていく必要があるとも主張し、この仕事は建設技術者が取り組むべき業務だ。災害マネジメントの視点から考えると、地域の企業や技術者がやらなければならないことが見えてくる」と述べた。

◎　◎

パネルディスカッションでは、コーディネーターの増田氏が「震災の教訓をどう生かすべきか」と問題を提起。これに対し草柳氏は、法制度や行政組織などの問題点・改善策を示したほか、「学生に被災地を見せ、生々しい現場を五感で感じてもらう。そうした体験が復興を担う若い人たちのエネルギーの源泉になるだろう」とも述べ、長期にわたる復興事業の担い手となる技術者の育成の必要性を説いた。

池田氏は「システムを構築する技術力と、短期間で建設する組織力はすごい」と日本の技術力・組織力を称賛。その上で「『安全』は技術や仕組みで説明できるが、『安心』は相手の気持ちになって接しないと駄目だ。被災者の心に入れる、技術者が求められている」と指摘した。

土木工学でも津波や街づくりの研究は遅れていたと指摘した皆川氏は「震災後、津波やまちづくりが自分の問題になった。建築と土木が連携して多面的視点で考えていくことが重要だ」と主張。濱本氏も「土木、都市計画、建築をどうつないでいくかがテーマだ。本学では都市工学と建築学の連携が始まっており、今後も一層推進していきたい」と賛同した。

最後に天野氏は「専門家の役割や、専門家への期待は高まっており、次代を担う学生たちに被災地を感じる機会を設けていきたい。今後も長期的に都市工学、建築学が連携し、考え、行動していきたい」と討論を締めくくった。

巨意でどこまだけの情報を得ているだろうかと問題提起し、「技術者や科学者には、市民に分かるように説明する責任がある。社会とのコミュニケーションのあり方をあらためて考えていかなければならない」と強調した。

津波に対する建築学会の動向を報告した濱本氏は、「津波は土木工学や地震学の分野とされ、これまで建築学では深く研究されてこなかった。私たちは大いに反省しなければいけない」と述べ、津波に対する街や建物の安全性を考え、人命を守ることは建築学の役割だと訴えた。

湾の形や向き、押し波と引き波などによる建物被害、ハード

「建築100人展2012」開く

「考・震災展」で被災地活動も紹介

卒業生の被災地の活動や学生の作品を出展

東京都市大学工学部建築学科の卒業生で構成する如学会（山岡喜彌会長）は24、25の2日間、会員の活動を紹介する「建築100人展2012」を東京都世田谷区の同大世田谷キャンパス・建築学科棟（4号館）1階グランドギャラリーで開いた。約6000人の会員のうち意匠や構造、設備、家具、インテリア、絵画など幅広い分野で活躍している100人以上がパネルや模型、制作作品などを出展。学生が授業で取り組んだ模型なども展示された。昨年に引き続き「考・震災展」も併設。久ノ浜（福島県いわき市）のワークショップなど、卒業生が取り組む被災地での活動についても情報発信した。

●この記事・写真等は日刊建設工業新聞の許諾を得て転載しています。
無断で複製等、著作権を侵害する一切の行為を禁止します。

東京都市大学グループ
学校法人 五島育英会